

# 万吉だより

MA

GECHI

NEWS

第5号 平成18(2006)年9月

## 立正大学博物館の転換

館長 池上 悟

立正大学博物館は平成18年度で開館5年目を迎えた。平成14年4月に、直接的には熊谷校地内に設置された考古学陳列室を起源として開館された。開館以来企画展・特別展を重ね、また「博物館館務実習」などを行い、大学博物館として十分に教育施設としての機能を果たしてきたものと評価できよう。

博物館の館蔵資料は、半世紀以上に及ぶ故久保常晴博士と前館長の坂誥秀一博士（現名誉教授）の調査により蒐集された考古学資料、本年4月に86歳で亡くなられた本学同窓の吉田格氏により寄贈された縄文土器を中心とした“吉田格コレクション”、眞鍋孝志により永年にわたって蒐集されてきたアジアを中心とした世界各地の鐘を中心とした“撫石庵コレクション”が中心となっている。博物館の現状は開設に至る経過、展示施設の制限もあって考古資料が中心になっているものの、目指すべきところは人文・自然の各分野を包括した総合博物館である。総合博物館であってこそ、大崎・熊谷のそれぞれ4年一貫の独自学部の設置が明確化された2校地制への対応が可能となる。

平成18年度より文学部は大崎4年一貫体制を実現し、19年度からは仏教学部が後続する方針が明確化されている。18年度を経過すると、多くの学芸員志望者を抱える2学部の学生が熊谷校地には恒常的にはいなくなる。狭隘な大崎校地のみでは立正大学は成り立たない。広大な敷地を誇る熊谷校地があつてこそ、旧制以来の伝統を誇る立正大学の存続が可能となる点は明白である。しかしながら大崎に本拠を置く学部学生の熊谷校地利用には、課外活動・実習・集中授業などあるものの自ずと限界がある。法学部・社会福祉学部・地球環境科学部が主体となる熊谷校地に学問する学生への対応を十分に考慮した博物館体制の整備が急務といえよう。

あたかも本年は昭和41年の熊谷校地の開設以来40年を経過し、施設の再整備が課題となり実践に移されつつある。この動きの中に博物館も含まれるようである。教育施設を時代の経過とともに機能を刷新して学生に供するのは大学の責務であり、現状の維持に拘泥するところではない。より充実した立正大学博物館として、複数の専門職員をかかえた世間に誇れる内容を具備した大規模施設の具体化が望まれる。

博物館の開館に至る準備期間から業務に携わり、博物館の定着に大きく寄与してきた上野恵司文学部特任講師は、平成17年11月に急逝された。文学部博物館課程の担当者として、また博物館の専門職員としても兼務してきた。博物館内容を熟知した存在として期待されるところ大であったが、多いに惜しまれる。

また開館以来博物館長を務められてきた坂誥秀一博士は平成18年3月で定年を迎えられ、4月からは名誉教授に就任された。半世紀にわたる長きに及ぶ立正大学生生活の最後の仕事として博物館を開設され、基本的運営を实践されてきた。

博物館長の坂誥秀一博士の定年と、専門職員であった上野講師の急逝という緊急事態を迎えた結果として、そして、23年間坂誥秀一博士のもとで文学部に勤務してきた経験が勘案されて館長職に就任した。前任館長の確立された基本を堅持しながら、更なる発展を期したい。

## 耐震偽装事件から透けて見えること

～遺跡調査も博物館も無縁ではない～

村田 文夫



平成17年暮れは、マンションやホテルなどの耐震偽装事件が世間を驚かせた。私は加熱気味の報道に接しながら、冷静に考えれば考古学の世界も、博物館の世界も無縁ではないことを感じていた。結論的には、問題の本質である「官から民」への止めようもない流れのなかに、遺跡調査のチェックも博物館運営も大きく揺さぶられているのである。

マンションやホテルなどは市街地だけに建つわけではない。当然、丘陵・台地の形質を変更して建つ場合がある。計画地に周知の遺跡が存在していれば文化財保護法の規定により事前の発掘調査が必要であり、また工事中に遺跡が発見されても所用の手続きが必要となり、文化財行政側もそれを指導する立場にある。この一連の流れは、事業者が計画地に遺跡の存在を知っていて良心に従って行政側と事前に協議するか、開発計画を事前調整する行政の部署で遺跡の存否をチェックし、存在しているので教育委員会側の指導を得よう説明した場合にほぼ限られる。実態としては、ほとんど後者であろう。結局、「官」という組織内での連携プレイでしか基本的にはチェックできないのである。

では、話題の民間確認機関が遺跡の存否を事前チェックしてくれているか。詳しい事情を知らない第三者が軽々に推断すべきではなからうが、十分にチェックされているとは考えにくい。仮に民間確認機関に遺跡の存否を事前チェックして欲しいならば、まず遺跡の住民台帳ともいえる「遺跡地図」を各機関に配布し、その利用の仕方、法律的手続き一式と根拠を明示し、特段の協力を求めなければならないからだ。迅速な建築確認をするために民間確認機関を法律的に整備した政府の政

策からすれば、調査費用と多くの期日を要する遺跡の事前調査は「邪魔者」にしか映らなからう。ちなみに特段の地形の形質変更を伴わなくても、大きなマンションはどんどん建つのである。ということは、遺跡の破壊も日常的に進行しているということである。

かくして、遺跡は闇から闇へと葬られているのではなからうか、と危惧される。つまり考古学の基本資料が、一方的にむしばまれているわけで、実は足元の「遺跡」が震度5強以上の激震に見まわられているのである。私はこうした推測が、杞憂であることを願わずにはいられない。

一口に博物館（美術館）というが、設立の主体者は「官」から「民」に至まで多様である。しかし実態としては、大学設立博物館のほかは、都道府県・市町村立（出資財団も含む）が主流であり、私たちはこれらの施設を訪れ多くの資料・情報を見聞する。その博物館の運営を民間に開放しようという法律が整備され、その具体的な動きが見えてきた。指定管理者制度である。地方自治体によって対応は多様であるが、この潮流は建築確認の民間開放と同じであって、その背景にはひたすら効率化を求める「官から民」への潮流がある。博物館といえども時流に抗しきれない面があるようだ。

国立博物館の場合は既に独立行政法人化され、斬新な企画を取り入れ観覧者数なども増加傾向が見えている（朝日新聞05・12・7夕刊）。その他、東京都写真美術館や江戸たてもの園なども、学芸員の企画力と相まって多数の観覧者で賑わいをみせていると側聞する。頑張れば観覧者数の実績にあらわれるし、頑張っている博物館は他にもまだ多くあろう。

私のこれまでの博物館経験からすれば、施設長を含む学芸関係の管理職は専門家が望ましいのに決まっているし、民間に運営を開放する指定管理者制度は、到底なじまない。でも、時代は内実を深く吟味をせずに「官」から「民」へ大きく流れている。

現職の学芸員、学芸員をめざす大学生に望むも

の——。それは、徹底した自己開発と主体性をもった事業への取り組みであり、組織人としての思考・行動などである。博物館には、この逆の行動様式をとる人が少なくない。周囲から「学芸員の常識は、世間のオタク」と指弾・揶揄されるような行動様式をとる学芸員が、仮に主体を占めるようになったら、指定管理者制度導入に格好の口実を与える。現職の学芸員は、配転を余儀なくされる。指定管理者に手をあげる企業がないから大丈夫？ その前に、施設が閉められてしまおう。耐震偽装事件は、決して私たちの考古学・博物館と無縁ではないのである。

(立正大学文学部講師)

## 立正大学博物館に期待すること

松原 典明



平成14年4月、大学の創立130年を記念し、多くの卒業生が望んでいた待望の大学設置博物館として開設された立正大学博物館は、開館2年目という短期間に博物館相当施設として認められました。

現在、開設から4年間が経過する中で、開館準備から中心となって活躍されてきた上野恵司先生は、悲しくも平成17年11月に42歳という若さで急逝されました。同窓には待望の博物館施設開館ではあったが、かけがえのない大事な人物をなくしたことは大きな痛手です。今後はこの悲しみをのりこえて上野先生が果たせなかった志を十二分に組んで大きな発展を望みたいものです。

同窓の一人として、今後の立正大学博物館に望むことはたくさんあります。

これまで、開館以来毎年行われている特定テーマによる春の企画展あるいは秋の特別展を継続することで、内外に存在をアピールしていただきたい。

たとえば、2004年の春の「南極、自然と人」、秋の「釈迦の故郷」などは本学の特徴を十分に表現し、加えて長年教育会に多数の人材を排出してきた「立正の地歴」がこれまで関連諸学に果たしてきた役割をも端的に示し得た興味深い企画であったといえよう。

また、戦前より、本学の考古学の発展のために努力されてきた久保常晴・吉田格先生などの考古学関係者による発掘資料が膨大に蓄積されていることは展示公開されている資料を見ても一目瞭然である。これらの考古資料の中には、重要文化財としての価値を有するような資料をも含まれている。したがってこのような蓄積された考古資料のデータベース化や、デジタル化、貴重資料の公開など教育普及を視野に入れた保存活用を目指して関係学会への立正大学の存在感を高めて頂きたい。そして専門知識を必要とする研究者に対しては、大学博物館が発揮すべき研究機関的として学術的な性格を十分に果たし、加えて地域においては、万屋の性格を有した開かれた総合博物館を目指していただきたい。

いわばヒューマンミュージアム、人間を見つめた博物館、資料館、知識センターを目指していただきたい。

たとえば、今日では地球規模による異常気象、温暖化が叫ばれる中、人類がこれほど歩んだ600万年のはるかな旅を見直し、人類の旅の途中に出会ったヤングドリラス（海層深層水）による気象変化などから縄文土器を生み出し、稲の栽培を行った祖先がいたことを再確認し、これまでの人類歩みと自然環境との関わりを再度確認し、クローズアップし、太古の人々からのメッセージを聞き直す。このような過去と現在、そして未来を繋ぐテーマなどにも、積極的に取り組んでもらいたい。

(立正大学文学部講師)

# 展示資料の背景 (5)

## 熊谷校地遺跡出土資料

池上 悟

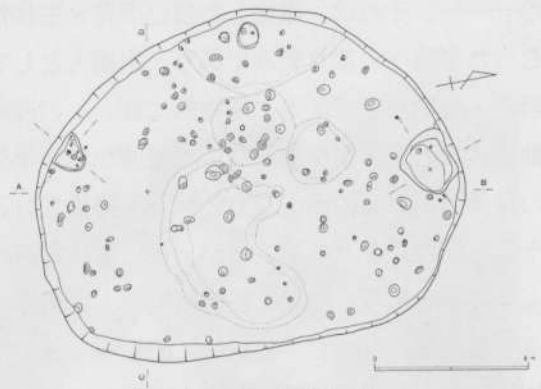
立正大学の熊谷校地は全面的に遺跡として周知されており、諸施設の建築にあたっては事前の埋蔵文化財調査が必要とされる。このため大学当局は昭和53年から恒常的に「熊谷校地遺跡調査委員会」を設置し、専任の職員を配置して遺跡の調査にあたってきた。

熊谷校地は、荒川に面する台地上に立地しており、校内には支流の吉野川が東流して敷地内を二分している。ほぼ30年に及ぶ十数回の発掘調査により30地点以上を調査しほぼ全面的に遺構の存在を確認しているものの、遺構・遺物は圧倒的に川の南側に集中して検出されている。

注目すべき成果のあった調査地点としては、現在は調整池となっているA地点は昭和53年に調査され、奈良時代の土師器・須恵器を出土した竪穴住居址が2軒が調査されており、集落の一部を明確にした。

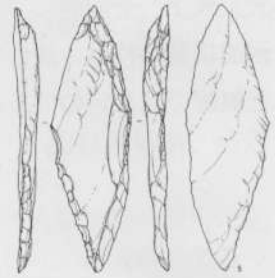
法学部棟が建設されているR地点は昭和63年に調査され、縄文時代早期後半の撚糸文土器を出土した竪穴住居址3軒が確認されており、多数の出土石器とともに貴重な資料と考えられている。周辺地区からは当該期の多数の土器片が出土しており、かなりの規模の集落の存在が予測されるところである。

現在ユニデンスが建っている地点は、平成6



R地点 第1号住居跡

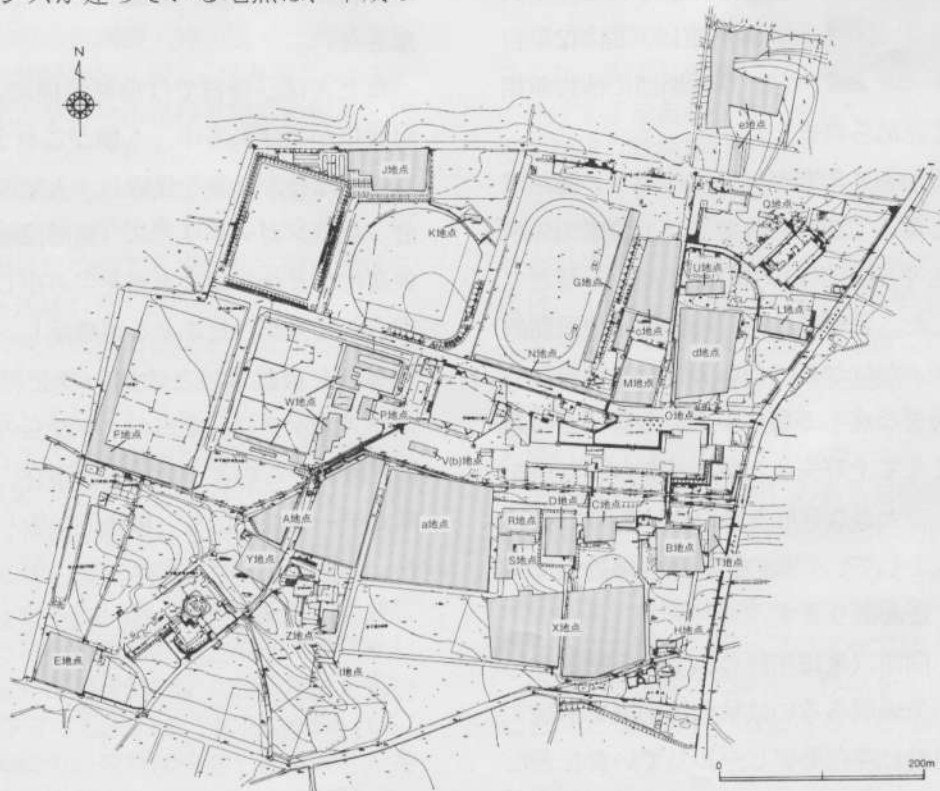
年に調査したX地点であり、ナイフ形石器・楔形石器などの旧石器時代の良好な資料が出土している。



X地点出土  
ナイフ形石器

また熊谷校地に隣接する特別養護老人ホーム地点からは、縄文時代・古墳時代・歴史時代の竪穴住居址4軒と、縄文時代早期の豊富な資料が出土している。

熊谷校地は開設後40年を経過して、再開発の時期に遭遇している。このため校地遺跡の調査は平成18年の現在も継続して行われており、今後も貴重な考古資料の出土が期待される。熊谷校地遺跡出土資料は、立正大学博物館の貴重な資料として展示・活用されている。



熊谷校地内既調査地点

## NEWS

## 来館者数

平成17年3月16日(水)～平成18年7月31日(月)

来館者数 2,394名

一般・学生来館者

平成17年度

4月350名、5月187名、6月455名、7月356名、8月152名、9月44名、10月39名、11月579名、12月65名、1月21名、2月95名、3月51名

平成18年度

4月230名、5月121名、6月477名、7月145名

## 来館者往来

〔高等学校〕

群馬県伊勢崎高校・群馬県市立伊勢崎高校・群馬県館林商工高校・群馬県西邑楽高校・群馬県前橋西高校・埼玉県川口総合高校・埼玉県西部台高校・埼玉県蓮田高校・埼玉県桶川高校・埼玉県上尾南高校・埼玉県深谷高校・埼玉県東京成徳深谷高校・埼玉県妻沼高校・埼玉県本庄第一高校・埼玉県行田新修館高校・埼玉県熊谷市立女子高校・埼玉県与野東中学校・東京都立正大学附属立正高校・東京都足立学園高校・長野県軽井沢高校

(計19校)

〔団体〕

神奈川考古学財団・彩の国いきがい大学熊谷学園・板橋区立郷土資料館・USM交換留学生・立正大学橘父兄会・立正大学同窓会・入試オープンキャンパス・その他

## 出版物

立正大学博物館では平成17年度～平成18年度にかけて、下記の刊行物を発刊しました。

- ・『万吉だより』第4号(平成17年3月刊)
- ・『立正大学博物館年報』4(平成18年3月刊)

## 資料の貸出し

- ・株式会社郷土出版

「貝柄山出土土器写真」1点

平成17年10月5日(水)～11月4日(金)

- ・板橋区立郷土資料館

「赤塚城址貝塚出土 縄文土器」13点・「城ノ

台北貝塚出土 縄文土器」1点(計14点)

平成17年10月8日(土)～12月4日(日)

- ・品川区立品川歴史館

「芝丸山古墳群出土 人物埴輪」1点

平成17年10月8日(土)～12月24日(土)

## 博物館実習

平成17年度博物館実習を以下の日程で行った。

- ・期 間：平成17年8月3日(火)～9日(火)

- ・場 所：立正大学博物館、熊谷校舎1203教室

- ・参加者：30名(文学部史学科15名・文学部社会学科3名・文学部文学科4名・法学部法学科1名・地球環境科学部環境システム科1名・地球環境科学部地理学科3名・文学研究科仏教学専攻2名・科目等履修生1名)

- ・内 容：主に考古学資料の取扱を中心として、資料の搬入、遺物の洗浄、接合・復原、拓本、資料の搬出を行いました。また、図録の作成として解説、図版、割付などの作業も行いました。その他に、自然史関係実習として、地球環境科学部の菊地隆男先生に、文化史関係の講義として塩野博先生をお招きして講義を行っていただきました。



実習作業風景

## 上野恵司先生を偲んで

昨年2005（平成17）年11月23日（水）、上野恵司先生が急逝されました。享年42歳でした。

上野恵司先生は博物館開設の準備段階から御尽力され、2002（平成14）年に立正大学博物館は無事開館を迎えることができました。その後も、博物館をより良いものにして、立正大学博物館を広く一般の方々に知って頂こうと努力されてきました。しかし、その志し半ばで他界されてしまいました。

今回、上野先生とともに博物館の運営に携わってきた3人の方に追悼の辞を頂きました。



上野恵司先生近影（博物館前にて）

### 哀悼の辞

坂 誥 秀一

2005（平成17）年11月23日、上野恵司さんが急逝された。42歳であった。

上野さんは、立正大学創立130周年記念として2002（平成14）年4月1日に開館した立正大学博物館の準備から開館にいたるまで一貫して担当した。さらに、2004（平成16）年3月30日付で「博物館に相当する施設」として埼玉県教育委員会から指定されるまでの準備作業にも率先して従事された。他方、立正大学文学部特任講師として、立正大学博物館課程の担当者として学生諸君の指導にもあたってきた。

揺籃期の博物館の企画展・特別展・公開講演会の実施、『立正大学博物館年報』、『万吉だより』（館報）及び『立正大学博物館課程年報』の編集と刊行にも尽力してきたのである。

このような博物館及び博物館課程に関する職責を超えて、さらに沢山の仕事を遂行してきた。学生諸君からの相談についても率先して引き受けられ親身にことを運ばれた。

大崎校舎の研究室に居る私にとって知る由もなかったが、次第に博物館には深夜に及んでも学生と共に在ったことを伝聞し、そのあまりにも過重ぶりを自重するようにと何回も話したが、何時もニコヤカニ「大丈夫です。楽しいですから」との返事のくり返しであった。

亡くなれる年の夏の終り、中国に出掛ける、と聞いて「強く止めた」が、知らぬうちに出発してしまった。旬日を経て「昨夜、成田に着きました。少し疲れましたが元気です」との電話で驚いたことがつい昨日のこのように思い出される。帰国の挨拶に大崎の研究室に來訪した上野さんを見て、そのあまりの体躯の変容ぶりに驚愕した。

その直後に入院。そして11月23日の早朝、帰らぬ人となった。痛惜のいたりである。

どうして周囲多くの人達の入院加療の説得に応じなかったのか。残念でならない。天命、であったのであろうか。

立正大学博物館の開設と運営、そして博物館課程の発展に全力で疾走した上野さんを偲び、心からご冥福を祈念して止まない。

（前立正大学博物館長・立正大学名誉教授）

### 上野恵司先生を偲ぶ

田村 佳道

「こんにちは」と今日もAさんは博物館にやってきました。先ず、美味しいお茶を上野先生の机の上にあげて手をあわせた。そして上野先生の思い出話にしばし時を忘れた。

昨年、Aさんは発掘のアルバイトを希望していた。そこで上野先生に相談したところ、快く知り合いのところを紹介して下さい、とのこと。後日、上野先生の話では、「女性であるということではちょっと不安だったが、厳しい発掘現場でも大変な根性を発揮して一生懸命務め、仲間たちからも可愛がられているということを知り大変喜んでいる。」とのことであった。

企画展の準備で大忙しのある日の夜、ちょっと慰問にと思って僅かながらの差し入れを持って博物館へ出向いた。玄関先からそっと覗いてみると、何やら賑やかな楽しそうな声が聞こえてきた。中へ入っていくと、展示フロアでは上野先生を中心に作品の位置について、作品を上へ下へ右に左においては眺めているところであった。

私が入っていくと、上野先生は「おおいみんな休憩にしよう、何か飲み物買ってこいよ。」と

声をあげた。そして和気あいあいと展示会の話題で盛り上がった。ほんの数十分の間であったが上野先生を中心に気持ちが一つになっているのを感じ、家路についた。

上野先生はまた、時々学生を連れて飲み会をしたり、地方の博物館の見学も兼ねて泊まり掛けて出かけ、夜を徹して酒を酌み交わして絆を深めていたようである。(お酒は一滴も飲まない?)

これが日常の多忙な業務からくるストレスから開放される一時であったのではなかろうか。旅行から帰ってくる時きまって旅行中の楽しかった様子を満面笑みを浮かべて私に話された。とにかく学生が大好きな上野先生であった。

私と上野先生との何気ない会話のなかで、「栃木県の高校の出身で、陸上部で主将を務めていたが、その年だけ陸上部の成績が悪かったのでOB会ではいつも肩身の狭い思いをしていた」と笑いながら話された。また、若さにまかせてちょっとツッパっていたので喧嘩には自信があったとも!

日頃の温和な人柄からは伺い知れないとの思いであるが、時々感じる上野先生の男気はこんなところからきていたのかも知れない。

上野先生どうか安らかに眠りください 合掌。  
(博物館事務担当)

## 上野恵司先生との思い出

内田 勇樹

私が、平成10年度に立正大学に入学した年に、上野恵司先生は非常勤講師として大学に来られました。将来考古学に関わる仕事に携わろうと大学へ入学したが、考古学という世界がどういったものか全く分かっていませんでした。そこに、5月から熊谷校地内遺跡の発掘調査があるとサークルの先輩から話を聞き、現地に行ってみると、そこで待っていたのが上野先生でした。この時から8年もの間お世話になるとは思っていませんでしたが(先生も思っていなかったでしょうが)、上野先生に発掘作業をやさしく分かりやすく教えていただきました。その後「遺跡調査室で整理作業があるから、授業の間などにきて手伝ってくれ」と話があり、私は授業の合間や大学に入って初めての学期末試験にもかかわらず、テスト勉強をそっこのけで遺跡調査室に通った思い出があります。それから、いろいろな調査や見学に同行させて頂くようになり、足繁く先生の所に通うようになり、様々な事を教えていただきました。

そして、私が大学4年になった年、博物館を開設する話を聞き微力ながら手伝わさせて頂きまし

た。上野先生も博物館を建ち上げることは初めての事で、各博物館の見学や展示ケースの構想など様々なことをやり遂げられ、平成14年4月に立正大学博物館が開館しました。準備期間中は、1週間泊り込みで遺物を展示したりしていたので、学生に疲労が見え始めると先生は「一旦作業をやめろ。お菓子と飲み物買ってきてあるからみんなで食うぞ」といって、冗談を言いながら私たち学生を和ませてくれていました。今思えば、大変な作業も良い思い出として話せるのは、上野先生の魅力からくるものだと思います。

上野先生は、普段冗談をいいながら学生達を楽しませていました。博物館学芸員課程を担当されていたこともあり、各学部の学生から慕われていました。けれども、その人柄の良さから様々なことを引き受けられ、私達からみても大丈夫ですかというぐらい忙しかつたのですが、当の本人は「忙しい忙しい。いつになったらゆっくりできるかなあ。この仕事が終わったら温泉にでもいこうぜ!」といい、淡々と仕事をこなされていた事が忘れられません。

今、漸く先生のされたいことが出来るようになったと思われま。また、違うところでいろいろな人を楽しませていることと思われま。いつの日か、上野先生のいつもの調子で「おめえよお、知ってるかあ!？」と旅話や調査話が聞けることを楽しみにしております。ご冥福をお祈り申し上げます。

(博物館学芸員)



第1回企画展の取材を受ける上野先生  
(埼玉新聞2003.7.25(金) 地域県北版より)

## 見学者の声

立正大学博物館では、来館者の皆様の意見を反映するためメッセージ箱を備えております。下記のご意見は多数寄せられたものから事務局で集約したものです。貴重なご意見、ありがとうございます。今後の博物館運営に役立たせていただきたいと思います。

- ・梵鐘がすばらしかった。何時間も見とれてしまいました。  
(県内・本学学生・19歳男性)
- ・普通の博物館にはあまりないものや、この大学の卒業生で立派な研究をなさっている方の研究業績をみて、大変驚きました。  
(県内・本学学生・19歳女性)
- ・イルカなどの骨を見て衝撃を受けました。昔使われたものが実際に目の前に、静かにあるということに感動を感じました。  
(県外・大学生・18歳男性)
- ・なかなか良かったと思います。いろいろな釣鐘があったことに驚いた。  
(県外・大学生・19歳男性)

- ・手作りという感じが出ていて、身近な博物館というイメージを持ちました。  
(県外・一般・34歳男性)
- ・とても静かで、きれいで驚きました。また、来たいと思います。  
(県内・大学生・26歳女性)
- ・解らないながら一生懸命見させて頂きました。近くにあるものを知らないことにも我ながら情けなくもあったのですが、ゆっくり時を過ごさせて頂きました。ありがとうございました。  
(県内・一般・40代女性)
- ・博物館がこんなところにあるとは知りませんでした。  
(県外・一般・50代男性)
- ・小さな博物館でしたが、展示しているものはどれも本物で貴重なものがたくさん見れて良かったです。  
(県外・一般・40代女性)

## 利用案内

所在地： 〒360-0161  
埼玉県熊谷市万吉1700  
立正大学熊谷キャンパス内  
TEL 048-536-6150  
FAX 048-536-6170  
開館日： 月・水・木・金・土曜日  
(大学休業中を除く)  
開館時間： 10:00~16:00  
\*火・日・祝日、及び大学休業中(夏・冬・春期休暇等)  
に開館を希望する人は、事前に博物館あるいは

総務部総務課(048-536-6010)にご連絡ください。

交通機関：・JR高崎線(上野から55分)、上越・長野新幹線(上野から35分)、「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス(国際バス)で約10分。  
・東武東上線(池袋から56分)「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス(国際バス)で約12分。

## あとがき

今年度より館長に文学部池上悟教授が着任されました。また、開館以来博物館の運営を担当されてきた上野先生が平成17年11月23日に急逝されました。私が大学に入学した時から公私共々いろいろお世話になっており、非常に残念でなりません。今年度より学芸員として博物館の業務を行っておりますが、上野先生に教わったことをひとつひとつ思い出しながらより良い博物館にしていきたいと思っております。不備な点が多いと思っておりますが、今後の博物館活動へのご支援を宜しく願います

(内田)

題字揮毫 田淵観斎(立正大学名誉教授)

立正大学博物館館報 万吉だより 第5号  
平成18(2006)年9月30日発行  
編集・発行 立正大学博物館  
〒360-0161 埼玉県熊谷市万吉1700  
TEL 048-536-6150  
FAX 048-536-6170  
e-mail: museum@ris.ac.jp  
http://www.ris.ac.jp/museum/index